

本州からのアマミマルケシゲンゴロウの発見と生息環境

岡田亮平¹⁾・渡部晃平²⁾・森 正人³⁾・稻畠憲昭⁴⁾

¹⁾ 199 Soi Thonglor 10, Klongton nua, Wattana, Bangkok, 10110 Thailand (wasserinsekt@kub.biglobe.ne.jp)

²⁾ 〒 920-2113 白山市八幡町戌3番地 石川県ふれあい昆虫館 (koutarouhigasi@yahoo.co.jp)

³⁾ 〒 561-0883 豊中市岡町南 1-1-10 環境科学大阪株式会社 (mori@kankyok.co.jp)

⁴⁾ 〒 601-8441 京都市南区西九条南田町 9

Discovery of *Hydrovatus seminarius* Motschulsky (Coleoptera: Dytiscidae) from Honshu, Central Japan with Notes on Habitats

Ryohei OKADA, Kohei WATANABE, Masato MORI and Noriaki INAHATA

はじめに

アマミマルケシゲンゴロウ *Hydrovatus seminarius* Motschulsky, 1860 はインドより記載された小型のゲンゴロウであり、アンダマン諸島を含むインド大陸、スリランカ、ネパール以東の東南アジア、台湾、中国に広く分布することが知られている (Biström, 1997)。本種は、Biström (1997) の定義した *H. oblongipennis* 種群 (第 11 種群) に属し、同種群においては、体サイズがかなり小型なこと、頭部前縁が完全に縁取られること、雄交尾器側片に強く均等に曲がった先端突起を備えること、および雄交尾器中央片の背面が幅広いことで特徴づけられる。また本種の雄交尾器中央片は僅かに変異がみられることが報告されている (Biström, 1997)。

日本産の本種は鹿児島県奄美大島産の個体をもとに *Hydrovatus matsuii* Nakane, 1990 として記載されたが、Nilsson (1995) は、後に発行される

Biström (1997) を参照し *H. matsuii* を *H. seminarius* の新参シノニムとして処理した。国内からはこれまでに鹿児島県口之島、中之島、奄美大島、沖縄県沖縄島、石垣島、および西表島から記録されている (Watanabe *et al.*, 2020)。

この度、筆者の一人岡田は本種を本州最南端の和歌山県串本町で採集する機会に恵まれた。また、渡部および稻畠による近年の本邦における本属の再検討における標本調査の過程で、兵庫県および三重県産の古い標本を確認することができ、森の個人コレクションからも兵庫県産の本種が発見された。本研究では本種を本州初記録として報告すると共に、本種の生息環境について報告する。

標本の保管場所については次のとおり略記した：岡田亮平コレクション (CRO)；渡部晃平コレクション (CKW)；森正人コレクション (CMM)；森井隆文コレクション (CTM)；愛媛大学ミュージアム (EUMJ)；北海道大学総合博物館 (SEHU)。

採集記録

本州 [初記録] : 2♂♂♂♂6♀♀ (CRO), 和歌山県串本町紀伊田原, 13. IX. 2015; 15♂♂♂13♀♀ (CRO, うち 5♂♂♂6♀♀は CKW), 同所, 3. X. 2015. 岡田採集 (図 1); 2 exs. (EUMJ), 兵庫県神戸市八多町, 4. V. 1987. 森採集; 1♂2♀♀ (CMM), 兵庫県神戸市大沢町, 9. V. 1992, 森採集; 1♂ (EUMJ), 三重県木本高校, 1958 年 (月日および採集者不明). Coll. Shozo Ishida.

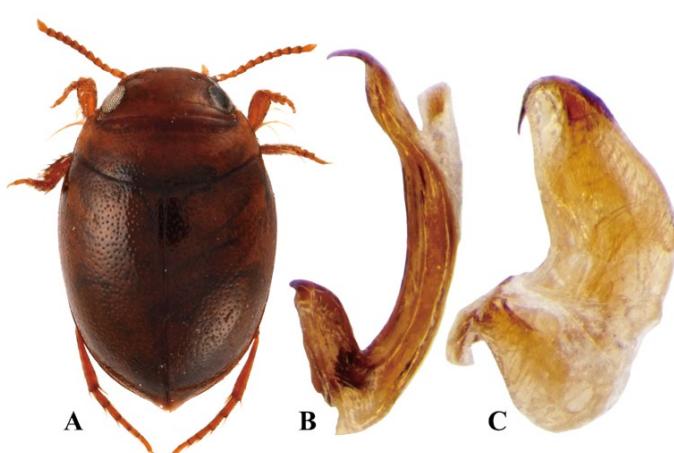


図 1. 和歌山県産アマミマルケシゲンゴロウ。A, 背面; B, 雄交尾器中央片; C, 雄交尾器側片。



図2. 和歌山県串本町における生息環境.

検視標本

鹿児島県奄美大島：1 ex. (SEHU), Nehara, Tatsugo T, Amami-Ôshima, Kagoshima Pref., 25. III. 1988. E. Matsui leg. (Nakane (1990) のホロタイプ標本)；2exs. (CTM), Kasekenmata, Tatsugô-chô, Ôshima-gun, Kagoshima Pref., 21. VIII. 2017, T. Morii leg.

沖縄県西表島：2 ♂♂ (CRO), 西表島ミナビシ, 29. III. 2015. 北野採集.

Thailand : 2 ♂♂ 2 ♀♀ (CRO), Chiang rai 県 Mae Chan District, Tha Khao Pluek, 24. XI. 2018. 岡田採集.

生息環境

和歌山県における本種の生息地は日当たりのよい開けた休耕田であり、採集時の水量は少なく、水深がある程度保たれている場所（水深20 cm程度）は休耕田中心の限られたエリアのみであった。本種は上述の休耕田中心部周辺の、水深10 cm程度の浅い水域から確認された（図2）。本生息地において本種は最優占種であり、その他のゲンゴロウ類としてはムモンチビツブゲンゴロウ *Neohydrocoptus* sp., コツブゲンゴロウ *Noterus japonicus* Sharp, 1873, ヤギマルケシゲンゴロウ *Hydrovatus yagii* Kitayama, Mori & Matsui, 1993, チビゲンゴロウ *Hydroglyphus japonicus* (Sharp, 1873), ツブゲンゴロウ *Laccophilus difficilis* Sharp, 1873, コシマゲンゴロウ *Hydaticus grammicus* (Germar, 1827) が同時に採集された。なお、本生息地から200 mほど離れた場所に位置し、環境省の重要湿地にも指定されている田原湿地からは本種は確認されなかった。

兵庫県における産地は、いずれもこの地域に多数点在する小規模なため池の一部で、岸辺の浅い場所から採集されている。当時は多数のケシゲンゴロウ *Hyphydrus japonicus* Sharp, 1873とともに採集

されていたが、現在では両種ともにまったく見られない。

地理的変異

本種の雄交尾器中央片を比較した結果、Biström (1997) が示唆している通り、中央片の先端部の形状には差異が確認された。和歌山、兵庫、西表島、およびタイ産の個体は先端部の腹面に毛を有さないのに対し、奄美大島産では腹面に毛を有していた。また、上翅の点刻の大きさにも若干の変異がみられたが、本種が広域分布種であることや Biström (1997) の検討結果より、本州産の個体も同種の範囲内に収まると判断した。

考察

中島ら (2020) および Watanabe *et al.* (2020) によると、本邦において本種の産地は局地的であり稀な種とされている。近年、本属他種については各地から新たな分布記録が多数報告されているが（稻畠, 2016; Biström & Watanabe, 2017；渡部・保科, 2016；渡部ら, 2016），本種についての報告はなく、渡部らによる本属標本調査でも近年の標本記録は極めて少ない (Watanabe *et al.*, 2020)。また過去の記録によると、本種が生息する西表島において同属で体サイズが類似するサメハダマルケシゲンゴロウ *Hydrovatus stridulus* Biström, 1997 やコマルケシゲンゴロウ *H. acuminatus* Motschulsky, 1860 と混生することが知られているが（北野ら (2010) ではマルケシゲンゴロウ *H. subtilis* Sharp, 1882 とされていたが、渡部の調査によりサメハダマルケシゲンゴロウであったことが判明している），和歌山県の生息地ではこれらの種は確認されておらず、本種が優占する稀な産地と考えられる。兵庫県では上述した通り近年の生息は確認されておらず、三重県の生息状況は不明であるが現在は生息当時の環境が残されていない可能性が高いと考えられる。和歌山県の生息地は九州以北かつ本州唯一の生息地であり、大変貴重である一方で乾燥化が進んでいる。近隣に同様の環境が残されていないことからも、生息地の早急な保全活動が望まれる。また、本報告により本州においても本種が分布することが判明したため、今後マルケシゲンゴロウ属の過去の採集記録の見直し、および新産地の再発見が期待される。

末筆ながら、西表島産および奄美大島産の比較標本を提供頂いた北野忠博士（東海大学）と森井隆文氏、各種示唆を頂いた林成多博士（ホシザキグリーン財団）と上手雄貴博士（名古屋市衛生研究

所), および文献情報のご教示と標本調査にご協力頂いた吉富博之博士(愛媛大学ミュージアム), 大原昌宏博士(北海道大学総合博物館)および松野茂富氏(和歌山県立自然博物館)の各位に御礼申し上げる。

引用文献

- Biström, O., 1997. Taxonomic revision of the genus *Hydrovatus* Motschulsky (Coleoptera, Dytiscidae). *Entomologica Basilensis*, 19: 57–584.
- 稻畠憲昭, 2016. サメハダマルケシゲンゴロウの日本からの初記録. さやばねニューシリーズ, (21) : 46–47.
- 森 正人・北山 昭, 2002. マルケシゲンゴロウ属. pp. 64–69. 改訂版図説日本のゲンゴロウ. 文一総合出版, 東京.

- 中島 淳・林 成多・石田和男・北野 忠・吉富博之, 2020. 日本の水生昆虫, 351 pp. 文一総合出版, 東京.
- Nakane, T., 1990. Notes on two species of Dytiscidae (Coleoptera). *Fragmenta Coleopterologica*, 45/48: 198.
- 渡部晃平・保科英人, 2016. 福井県におけるサメハダマルケシゲンゴロウの記録と生息地保全に向けた対応. さやばねニューシリーズ, (24) : 33–35.

- Watanabe, K., N. Inahata, & O. Biström, 2020. A distributional review of the genus *Hydrovatus* (Coleoptera: Dytiscidae) from the Ryukyus, Southwestern Japan. *Japanese Journal of Systematic Entomology*, 26: 111–118.
- 渡部晃平・富沢 章・稻畠憲昭, 2016. 本州におけるサメハダマルケシゲンゴロウの初記録. さやばねニューシリーズ, (23) : 15–16.

(2020年7月12日受領, 2020年9月30日受理)

【短報】熊本県におけるコジュウジアトキリゴミムシの生息場所について

筆者は2020年6月8日に、熊本県阿蘇郡高森町においてコジュウジアトキリゴミムシ *Lebia (Poecilothais) iolanthe* Bates, 1883の生態写真の撮影に成功したので報告する(図1)。かつて本種は国内では記録が少ない種とされていた(川津, 1962)。実際, Habu (1983) が記録した分布地は、栃木、静岡、長野、兵庫の4県に限られる。上野ら (1985) の保育社『原色甲虫図鑑(II)』でも、本種の国内分布域は本州のみとされていた。

しかし、深町(1978)が大分県九重から既に本種を記録していたので、70年代後半には本種が九州に生息することは知られていたことになる。また、深町(1978)によれば、この時点で宮崎県から捕れている未発表個体があつたらしい。熊本県内では、大塚勲氏が1994年に阿蘇郡西原村から本種を採集している(九州大学大学院農学研究院昆虫学教室. 昆虫データベース(KONCHU))。このように九州における本種の記録はいくつか散見されるものの、その

数は決して多くない。本稿は熊本県阿蘇郡における2例目の記録になる。

深町(1978)によれば、コジュウジアトキリゴミムシは燈火に飛来したことだが、本種の生態的知見は限定されている。筆者は晴天の午後2時40分に高森町の阿蘇外輪山麓の林縁部小径の草むらの葉上に静止していたところを発見し、1m程度の距離から撮影した。本稿で紹介した生息場所の知見が、今後の本種の分布記録を積み重ねていく上で、何らかの手助けになれば幸いである。

引用文献

- 深町宗通, 1978. 九重山でコジュウジアトキリゴミムシを採集. *Elytra*, 6 (2) : 66.
- Habu, A., 1983. Revised and supplementary notes on and descriptions of the *Truncatipennes* group of Japan (III) (Coleoptera, Carabidae). *The Entomological Review of Japan*, 38 (2) : 105–146.
- 川津知是, 1962. コジュウジアトキリゴミムシの採集記録. 昆虫学評論, 14 (2) : 47.
- 九州大学大学院農学研究院昆虫学教室. 昆虫データベース(KONCHU). 大塚勲氏寄贈熊本県産甲虫類データベース. (<http://konchudb.agr.agr.kyushu-u.ac.jp/colotsuka/index-j.html>)
- 上野俊一・黒澤良彦・佐藤正孝編著, 1985. 原色日本甲虫図鑑(II). 保育社. 514 pp.

(曲田清彦 841-0046 烏栖市真木町2031-5)



図1. コジュウジアトキリゴミムシ.

【短報】タイワンレンギョウの葉を食べるクロウリハムシ

クロウリハムシ *Aulacophora nigripennis* Motschulsky, 1857は、国内では本州、四国、九州、壱岐、対馬、大隅諸島、トカラ列島、奄美諸島、沖縄諸島、宮古・八重山諸島、大東諸島に分布する。奄美大島以南の南西諸島産は琉球亜種 *A. n. nitidipennis* Chûjô, 1935